

CONCORD-3 を用いた日本の 肝がん・膵がんの純生存率の推移

NISHIO Marisa
西尾 麻里沙
大阪医科薬科大学
JACR 専門委員



CONCORD-3を用いた分析報告のひとつとして、私は日本における肝がん・膵がんの生存率の推移と国際連携への示唆を発表させていただきました。貴重な機会をいただきましたことを、心より御礼申し上げます。

本分析では、2000～2014年に日本の16府県で診断された肝がん患者約12万人、膵がん患者約8万人を対象とし、組織型・病期・年齢別に5年純生存率を推定しました。肝がんでは、分析対象患者の約8割を占める



肝細胞癌で生存率の改善が確認されたほか、診断時に限局であった症例で改善傾向がみられました。年齢別では、54歳以下の若年層で30%台から40%前後へ向上しており、55歳以上の層では20～30%台で推移していました。日本の肝がんの生存率は諸

外国と比較しても高い水準にあり、2010～2014年の生存率はCONCORD-3に参加した国の中で唯一30%を超えていました。一方膵がんでは、約9割を占める腺癌の生存率は6.4%から7.5%で推移していました。病期別では、限局で診断された患者では40%を超える生存率が維持されていた一方、領域では10%前後、遠隔では5%未満で推移していました。年齢別では、54歳以下の若年層で5%前後の改善がみられましたが、55歳以上ではいずれの年齢群も10%未満の範囲で推移していました。こうした傾向は諸外国でも同様でした。

今回の分析を通じて、国ごと・疾患ごとの対策の成熟度の違いが改めて浮き彫りになったと感じています。特に肝がんでは、ウイルス性肝炎の対策やサーベイランス体制の整備など、早期発見と治療の積み重ねが着実に成果として現れており、日本発のエビデンスを国際的に共有する重要性が高まっています。一方、膵がんは早期発見が難しく、治療技術の革新に依存する部分が大きいため、各国とも改善が停滞している状況が続いています。こうした国ごと・疾患ごとの課題の

違いを国内外で共有することは、研究投資や国際共同研究の優先順位を考えるうえでも、生存率の推移の分析は重要な基盤になると考えています。

肝がん・膵がんを含む生存率の推移は、11本の疾患別論文と1本の総括論文から成るJapanese CONCORD-3 Monographとして発表される予定です。CONCORD-3のように大規模なデータの記述統計を論文として報告するのは私にとって初めての経験で、今回のシンポジウムの登壇に至るまで、大変多くのことを勉強させていただきました。私はがん疫学分野では初学者であり、今回CONCORD-3のデータを解釈するにあたり、全国がん登録の届出マニュアルをはじめ多くの関連文書を繰り返し参照しました。「データ」として私の手元にいただくまでに、数えきれないほど多くの方々の時間と労力が費やされており、その大元には患者さんとそのご家族がいるということを実感しました。昨年肝がん・膵がんの論文の最終稿をジャーナルに投稿した際には、いつも以上に緊張したことを覚えています。

私は基礎研究にも臨床現場にも直接関わる立場ではなく、診断・治療法の開発や実施に直結する役割は担っていません。しかし、CONCORDプログラムの成果を分析し日本の状況を客観的に示すことが、今後の研究や政策判断の一助となり、間接的に医療の進歩に貢献できることを祈っています。そして、CONCORDを含むがんに関する国際的な取り組みが益々加速し、膵がんをはじめとする多くのがん対策が世界的に前進していくことを心より願っています。

第84回
日本公衆衛生学会総会

2025年10月29日(水)～31日(金)

会場 グランシップ (静岡県コンベンションアーツセンター-静岡市)

学会長 尾島 俊之 浜松医科大学健康社会医学講座 教授

実行委員長 田原 康玄 静岡社会健康医学大学院大学 教授

https://plaza.umin.ac.jp/~jsph84/

フリーの
くりと
機管理

